

実習記録の活用法に関する一考察

A Study of the Way to Apply Practice Records to Some Lessons

菊野 秀樹

Hideki KIKUNO

キーワード：保育者論・保育原理・子ども観・保育観

はじめに

本研究の目的は、本学科1年生の付属幼稚園実習記録から学生の「子ども観」「保育観」を考察し、今後の実習事前・事後指導、保育者論、保育原理のシラバスを作成する際の参考とするところにある。

2014年6月18, 19, 20日にI組, 23, 24, 25日にII組が、付属幼稚園で初めての实習を行った。実習後の記録を見ると、「自分には知識や技能が全然ついてないと感じた」「行動すべきところで行動できていなかった」「先生は語りかけを大切にしていると思った」など抽象的な表現で自己反省的な感想を述べる記述が多くあった。どんな知識、技能、行動が足りないと思ったのか。それはどうしてそう感じたのか。先生のどんな語りかけに感銘を受けたのかは具体的に記述されていない。保育後のカンファレンスにおいて、具体的事例から学ぶことができないのは残念であるが、丁寧に読み解いていくと、いくつかの記述から、学生Aの内面を推し量ることができた。

そこで本稿では、学生Aの実習記録を通して「子ども観」「保育観」を推察し、授業における実習記録の活用法を考えていきたい。

1. 学生Aの実習記録を読み解く

実習記録Aは、学生Aが記した6月20日の実習記録である。この記録を選んだ理由は、本学科生がよく使う抽象的表現が多いこと、また、構成がわかりやすいことからである。[気づき]は著者の気づきである。

実習記録A

1. 「実習にあたっての自己目標」

私は観察実習で子どもの行動をしっかりと観察し、子どもはどのようなところで喜び、どのようなところで悲しむのかといった子どもの感情表現について理解できるように、次の三つの目標を立てて取り組みたい。まず、一つの目標は、子どもの遊びの様子をしっかりと観察することである。子どもは自由に遊んでおり、素直に行動しているときが一番自分の考える遊びに対して強い思いを持っていると考えられるので、その時の子どもの行動をしっかりと観察し、また、その時の子どもの表情を見て、どのような感情を表現しているのかを理解できるようになりたい。二つ目の目標は、子どもの発する「ことば」をしっかりと観察することである。私は、「ことば」は自分の感情を表現するひとつの道具ではないかと考えている。子どもは何か行動を起こす前や、行動しているに常に言葉を発していると思うので、その「ことば」から子どもの感情を理解できるようにしたいと思う。また、「ことば」を発することが苦手な子どもは表情をしっかりと観察したい。

三つ目の目標は、幼稚園の先生方の行動をしっかりと観察することである。私自身はまだ子どもに関しての知識や技術が未熟なため、先生方がどのように子どもたちに働きかけ、どのような行動をとっているのかしっかりと観察し、将来子どもに良い働きかけができるようになりたい。

また、私は今回の観察実習で年中組の担当になり、年中児は園での生活にも慣れ、年長児の刺激を受け様々な遊びを展開していることを聞いたので、どのような遊びを展開し、どのような工夫をして遊んでいるのかということもしっかり観察したい。

これらの目標をしっかりと持って、子どもの行動、また、先生方の行動を観察し、子どもの感情表現や遊びの工夫、先生方の働きかけが理解できるように心がけて実習に臨みたいと思う。

[自己目標の気づき]

1、「しっかり」という言葉が頻繁に出てくる。2、自由遊びにおける素直な子どもの姿から子どもの感情を学びたいと思っている。3、先生の働きかけを学びたいと思っている。4、実習に対する期待と学ぶ意欲が感じられる。

日誌

子どもの活動	保育者の援助
10:00 自由な遊び	<ul style="list-style-type: none">・一緒に積み木や細棒作りをし、子どもの遊びの助言をしている。・泣いている子供に語りかけ、解決の道に導く。・片づけへの促し。・ミックスジュースの歌の伴奏（弾き歌い）・体をやや左に向け、子どもの表情を見ていた。・プール前の着替えで服を一緒にたたみ、子どもに教える。・プールに入る前、子どもを集め、子どもに危険がないようしている。・プールの中でワニさんのまねをするなど遊びを提供している。・速やかに机を出す・手洗いを促す・お茶を注ぐ・子どもと一緒にカブトムシの幼虫の勉強をしている・手遊び・紙芝居の読み聞かせをする・じゃんけん列車（実習生企画）・ゲームへの参加を促す・帰りのバスの順番に子どもを呼ぶ・月曜日も楽しく過ごせるよう遊びに期待を持たせる。・月曜日に誕生日会があることを知らせ、期待を膨らませていた。・一日のまとめや気づき、質問を発表する。・三日間のまとめ。
10:20 お集まり	
12:00 昼食	
12:30 自由な遊び	
13:50 お集まり	
14:00 掃除	
16:25 反省	

実習生の動き・気づき

- ・ プールに入りたくて泣いている子どもに足だけ入るなど、母親とともに解決へと導いていた。
- ・ 子どもは色や形をきれいにそろえ片づけをすることができていた。
- ・ うたを歌うとき、耳をふさいで歌う子や楽しそうに歌う子、全く歌わない子などそれぞれだった。
- ・ 上手に服をたたんだことをきちんとほめていた。
- ・ プールの周りに集まっているとき、子どもはプールに早く入りたい気持ちを我慢し、待っていた。
- ・ 先生や実習生に水をかけてくる子どもが多い。
- ・ プールの中だけではなく、砂場に行き砂遊びをするなど、遊びの幅を広げていた。
- ・ カブトムシの幼虫など、虫も生きているということを教えていた。
- ・ 紙芝居は、はじめ落ち着きがなく話を始める子どもが多かったが、少しすると紙芝居の話に引き込まれている様子だった。
- ・ じゃんけん列車は楽しそうにしている子どもが多かったが、負けるということが嫌いで参加を拒む子がいた。

[日誌の気づき]

- 1, 子どもの活動の具体的内容が記されていない。
- 2, 保育者の援助の具体的記述がない。
- 3, 保育者の動きなのか実習生の動きなのか不明確。
- 4, 子どもの姿が具体的に表現されている。

実習日誌「省察」

今日は、子どもの言動を観察し、先生方の働きかけを観察するという目標に取り組んできた。この目標を達成することができるよう観察をしていくと、子どもはどんな小さいことでも一喜一憂することがわかった。しかし、私たちにとっては小さく見えるような出来事でも子どもにとっては、一つ一つの成長のための大切な出来事だということを学ぶことができた。また、先生は子どもの成長のため、すべて解決方法を与えるのではなく、子どもが自分で解決できるよう導いているということも学んだ。先生は“語りかけ”を大切にしていると思ったし、子どもへの働きかけが素晴らしいと感じ、私も将来の保育者として子どもに良い働きかけができるだろうかと不安になるが、先生のように素晴らしい働きかけができるよう、たくさんの知識や技術を身に付けたいと思った。また、午後のお集まりで15分ほどの企画を立てた。子どもの日頃の様子を観察し、全員の子どもが楽しめるよう企画したが、なかなか先生のようにはいかず、悔しかった。まず、子どもを知ることが、これから先の続く課題だと感じた。

[省察の気づき]

1, 子どもの活動や心の動き、また、保育者の配慮が記されているが、すべて抽象的表現なので、実習生がどうしてそのように感じたかがわからない。

2, 保育者の「語りかけ」「働きかけ」は素晴らしい。しかし、自分はそうなれるだろうかと不安をもっている。

3, それでも良い保育者となるよう知識や技術を身に付けたいと思っている

4, 実践を経験するとうまくいかなかったようだが、どのようにうまくいかなかったのかがわからない。

5, 実践の失敗を踏まえ「子どもを知る」ということが課題であると思っている。

「実習の反省と課題」

三日間の観察実習を終えて、まず私は子どもに関しての知識がまだまだ未熟だということを知ることができた。初めての幼稚園の観察実習で、戸惑ったところもあるかもしれないが、自分からな

かなか積極的に子どもとかかわることができず悔しい思いをしたところが反省だ。先生方はいつでも子どものことを考えて行動しており、子どもたちも先生をとっても信頼している様子だった。自由時間の遊びやお片付け、また、お集まりの時間など、日々子どもたちの信頼が見られた。

私は三日間の観察実習の午後のお集まりで子どもの好きな遊びを考えて企画させていただいた。A組の子どもたちはとてもジャンケンが好きそうな様子だったので、「ジャンケン列車」を取り入れた。いつもジャンケンを楽しそうにしていたので、皆楽しくジャンケン列車をしてくれるだろうと思っていたが、嬉しそうに参加してくれる子ども以外に「ジャンケンに負けるのが嫌だ」といって参加を拒む子どもも出てきた。それはなぜかと考えると、私たちはジャンケン列車で遊ぶ前、きちんとゲームの説明をしていなかったことが分かった。まず、私たちが見本を見せるということが大切で、いろいろな友達とふれあえる楽しさを伝えなければならなかったということをおぼることができた。先生方はいつも子どもに配慮しており、毎日の継続性で子どもの特徴をつかみ、子どもの興味や関心がどこにあるのかということを考えていると思うと、とても尊敬する。一方、自分はそのような配慮ができるのかと不安に感じた。だから私はこれから、子どものことを知り、子どもの興味や関心がどこにあるのかということを考えることを課題にしようと思った。

[実習の反省と課題の気づき]

1. 全般的に未熟さを感じているのであろうが、具体的にどのような知識が未熟なのかわからない。
2. なぜ戸惑ったと思うか。
3. なぜ積極的にかかわれなかったのか？

考察 1

学生 A は、実習の目標を「自由場面における子どもの感情の動き」「子どものことば」「先生の働きかけ」としている。「子どもの感情の動き」に関しては、省察で「子どもはどんな小さいことでも一喜一憂することがわかった」と述べている。「子どものことば」に関しては「ジャンケンに負けるのが嫌だ」という記述がある。「先生の働きかけ」に関しては、「実習生の動き・気づき」の中でたくさん記述しており、その特徴として、片づけ、歌、プール、紙芝居を見る、ジャンケン汽車など、設定保育の場面であるということ、そして、「子どもの自我の働き」に注目したものであるという二点あげられる。また、「ジャンケンに負けるのが嫌だ」という記述も「自我の働き」であることから、学生 A は、設定場面における「先生の働きかけ」と「子どもの自我の働き」に強い関心をもっていることがうかがえる。保育者を目指す学生としては当然のことだろう。

しかし、ここでもう一つ注目したいのは、学生 A が子どもから「大切なこと」を学んでいることである。それは省察で述べている「子どもはどんな小さいことでも一喜一憂することがわかった」という箇所である。おそらく学生 A は、子どもが全身で感情を表現している姿を見て、自然に心が動いたのであろう。立場を超えて、子どもの純粋な姿にただ心を動かされたのであろう。保育者や研究者の中に、子どもの一生懸命さに心を動かされ、子どもの世界に興味をもつようになった人がたくさんいる。学生 A も、子どもの純粋な姿から何か大切なことを感じとったのではないだろうか。それがフレーベルのいう「子どもに生きようではないか」¹ということである。フレーベルの有名なこの標語は、子どもから生きる喜びを学ぼうということである。そして、幼児の教育は、子どもの内にある力を引き出すことであるという「子ども中心主義の保育観」を象徴する言葉である。学生 A がここで感じたことは、自身の「子ども観」「保育観」の形成に影響を与える大切な出来事なのである。おそらく、学生 A はこのことに気づいていない。実習後、このことに気づけるような指導が必要である。

2. 学生が実習で学びたいと思っていること

自己目標から学生が実習で何を学びたいと思っているかを考察していく。資料の実習記録は、無作為で選んだ一年生 28 名のものを使用している。自己目標は、一人が二つまたは三つを設定する場合が多い。

自己目標

「保育者の働きかけ」 22 名

- ・ 将来の良いはたらきかけができるために、先生方のはたらきかけを観察する。
- ・ 保育者の子どもへの対応 ・ どのような援助をしているか
- ・ 保育者は発達に合わせて、どのような言葉かけをしているか
- ・ 積極的な子と消極的な子へのかかわり方の違い
- ・ 先生を観察 子どもが言うことを聞いてくれないとき、どうするか・しつけの仕方
- ・ しかるべきところは叱り、ほめるところは褒める

「保育者の仕事」 7 名

- ・ 保育の環境設定・保育の現場について知り、保育者の仕事のあり方について学びたい。
- ・ 幼稚園教諭の仕事内容を知る・幼稚園の仕組み・流れについて知る。・保育者にはどのような能力が必要か見極める。

「自分の目標」 16 名

- ・ 笑顔でしっかり挨拶する。・意欲的に取り組む。・遊びを大切にし、一緒に楽しむ。
- ・ 自分に欠けていることを発見する・姿勢よく・きちんと見る・子どもの小さなところまで注意深く観察する。・言葉使い・発言や行動をしっかりと観察していくこと
- ・ 保育現場で自分がすること・健康管理、言葉使い、マナー

「子どもについて」 11 名 子どもの遊び、感情、気持ち

- ・ どのようなことで喜び、どのようなところで悲しむのかという子供の感情表現について
- ・ なぜ泣いているのか、怒っているのか・想像力や表現力
- ・ 子どもの遊びに興味を持つ。何をしているかわからない遊びを注意深く見守り、子どもが何を思っているのか、なぜ楽しいのかを観察したい。・なぜそのような行動をとるのか
- ・ 子どもの興味。何をしようとしているのか
- ・ どのような表情をしているのか 気持ちに合わせた保育をするために
- ・ 子どもは保育者のどのような行動をよく見ているか
- ・ 子どもの発見を見つける
- ・ 表情を読み取る

「子どもの発達」 8 名

- ・ 子どもの発達の様子を知る。
- ・ 子どもの気持ちを理解する。
- ・ 子どもの発達と遊び方を理解する
- ・ 発達段階を見ていける実習
- ・ 年齢ごとの発達段階やどのような遊びをしているか
- ・ 子どもたち同士のかかわり（積極的な子と消極的な子との交わり）
- ・ 子ども同士のかかわりがどのように行われているか
- ・ 個人差を観察すること

「言葉」 4 名

- ・言葉をしっかり観察する。言葉の苦手な子は表情を観察する。
- ・子ども同士の会話
- ・子どもの行動や言葉

「けんか」 2名

- ・イメージがちがう場合の遊び方
- ・子ども同士のイメージの違いやけんか

「遊びについて」 5名

- ・あそびとはどのような工夫がされているか
- ・各年齢の子どもが興味を持っている遊びを知る。それを知っていると遊びを発展させるための援助ができる
- ・どんな遊びがあるかを知る。
- ・遊びを通して新しい遊び方を見つけられるか？ 初めて感じたり知ったりするのか？
- ・遊びを観察する
- ・平行遊びについて

その他 2名

- ・幼稚園と乳児院との違い
- ・実習先の園について知る。

考察2

28人中22人が「保育者の働きかけ」を学びたいと思っている。子どもを指導できる保育者になるために、ベテランの先生から子どもへの働きかけを学びたい。それは、1年半後には保育者として現場に出るのであるから学生にとっては当然の願いであろう。しかし、そこに、自己反省的表現が多くなる一因があるのではないかと。実習において部分指導を行った学生は、先生と自分との違いに愕然とする。子どもたちは、自分が声を出しても耳を傾けないが、先生が一声かけるとみんな集まってくる。保育者になりたいと思っている学生たちは、なんとかして先生のようになろうとその言動を注意深く観察する。しかし、先生と自分たちと何が違うのか具体的にははっきりしない。とにかく記憶に残るのは、先生のすばらしさと自分たちの力のなさである。

学生Aは反省を次のように書いている。「先生方はいつでも子どものことを考えて行動しており、子どもたちも先生をととても信頼している様子だった。自由時間の遊びやお片付け、また、お集まりの時間など、日々子どもたちの信頼が見られた。」「先生方はいつも子どもに配慮しており、毎日の継続性で子どもの特徴をつかみ、子どもの興味や関心がどこにあるのかということを考えていると思うと、とても尊敬する。一方、自分はそのような配慮ができるのかと不安に感じた。だから私はこれから、子どものことを知り、子どもの興味や関心がどこにあるかということを考えることを課題にしようと思った。」

学生Aが、先生と自分との差を強く感じていることがわかる。そのことがあって、学生Aは、「先生の働きかけ」と「子どもの自我の働き」に強い関心をもつようになったのではないかと。そして、それが遠因となり、「自由場面における子どもの感情の動き」の記述が少なくなったのではないだろうか。

今回、学生Aの実習記録を丁寧に読み解いていった。それは、学生Aの内面を推察することになるが、学生全体の困り感を推察することにもつながっているように思う。しかし、これはあくまでも推察にすぎない。今回の推察の結果を学生と議論すべきであろう。そうすることによって、教員は、学生の心の内を理解することができ、今後の指導の参考になるであろう。また、学生は、自分と

向き合い、自分の心の内を整理することができ、今後の実習につなげていくことができるだろう。

まとめ

学生 A の実習記録は、本学科の学生によくある抽象的な表現の多い記録となっている。しかし、丁寧に読み解いてみると、学生 A の「子ども観」「保育観」を推察することができる。学生 A は、「保育者の働きかけ」と「子どもの自我の働き」に興味があるようである。その興味は、付属幼稚園の先生のように自分もよい働きかけができる保育者になりたいというあこがれからきている。その願いは、学生にとって当然のことだろう。しかし、私は、学生 A の「保育観」が「大人中心の保育観」に傾いているのではないかと心配になる。実習を通して、学生 A は設定保育の指導場面に強い関心をもつようになってきていると思えるからである。

考察 1 で述べたように、子どもの純粋な姿から子どもを知り、「子ども観」を形成することが保育のスタートである。その点学生 A は大切な気づきをしている。実習後の授業においては、そのような気づきがなぜ大切かを考える機会をもちたい。それは「子ども中心の保育観」について考えるきっかけになるからである。

学生 A ばかりでなくたくさんの学生が、このような大切な気づきをしていると思われる。教員は、「子ども観」「保育観」の形成に影響を与えると考えられる記述に気づき、学生にその記述の大切さを知らせていかなければならない。そのためには、実習記録の丁寧な読み解きが必要となる。これには、付属幼稚園の先生方や実習担当の教員の協力が必要であろう。丁寧に読み解くことが可能になれば、実習記録は教材としてさらに価値のあるものになる。そして、初年次セミナー、総合演習、保育者論、保育原理の授業でも活用ができるものとなる。グループディスカッションを通して、様々な意見の交流を刺激とし、自分の「子ども観」「保育観」を見つめるという授業が必要である。今後も、実習記録を有効に活用し実践と理論が結びつくような授業を模索していきたい。

註

i フレーベル（荒井武訳）『人間の教育（上）』岩波書店，1964年，119ページ